

# 話せるクラブ

大村伸一

その日は朝から誰もが不機嫌で、地下鉄は斜めになって暴走し、定期旅客機は難解な早口言葉を乗客に何度も繰り返させたまま置き去りにしていった。電話交換機は朝食のためにまだ使用されている番号を準備していた。ただ路線バスだけがふてくされたように時刻を守っていたが、それは明日からの運賃の値上げを密かに決意していたからだ。去年設立された値上げ対策委員会の計画は着実に成果を上げており、今年16度目の値上げに市民はまだだれも気付いていない。

だから、その日はいつもの仕事もひどく投げやりになり、上役は気難しい表情を硬直させながら席に座っていて、判を押す手つきにも妙に力が入っていた。工場では一日中壁を見つめ続けることが仕事で、隣の同僚の顔よりも壁の染みの方に親しみを覚えている。染みは毎日取り替えられるのか、同じものを見たことはない。おそらく上役の仕事は同じ染みを同じだと気付かせないことなのか、毎日違った染みを配給することなのか、どちらかなのに違いない。あるいは、そのどちらなのかを工員達に気付かせないことなのかも知れないが。

終業のベルが鳴り、上役の視線に背中を小突かれながら、薄暗い仕事場から転がり出たとき、そんなことに無関心な街が夜空を隠そうと水銀灯をきらめかせ始めた。満たされない通行人たちは靴の踵でアスファルトをけりつけ、呼び込みの男たちはしゃがみこんでその靴跡をいつまでも撫でている。

街角で急に言葉が使いたくなかったとき、話せるクラブの前にいた。ネオンは誘うように体をくねらせていて、イルミネーションにゆらめく店の名前も左右が反対なのか上下が逆さまになっているのか、それとも語順が逆転しているのか、到底読むことはできなかった。入り口の暗がりでは思い詰めた格助詞がどこかで主語を見かけませんでしたかと来る人毎に尋ねていた。どういった主語を探しているのかと問い返しても格助詞ははにかんで視線をそらせるだけから、もしかすると嘘をついていたのかもしれない。

店の中は明るい照明で、どんな言葉にも無数の影を落としている。それを拾うのはボーイの仕事で、表情が暗いのは影が染みついているからだ。横をすり抜けるいわくありげなバ

ニーガールはお客に名詞を配っている。俺には「セルロイド」が当たったがそれにどういう意味があるのか誰も説明しようとはしなかった。彼女たちには教育はないが恋は溢れるほど持っていて、みがきあげたテーブルに句読点をいくつこぼしても、決して叱られることはない。勿論、それは恋の手管だから、男たちは揺れる尻の形に視線を奪われて自分に都合のいい解釈しかしようとしなない。

話せる相手が欲しいとおもったとき、目の前に知的な少年が立っていた。言葉のセンスに恵まれているのは、話し始める前からわかっていた。少年は会話をノートにとりながら言葉の意味がきらめく理由をずっと考え続けていたのだという。何か新しい言葉を知らないかと尋ねると、最後の言葉が使われたのは何世紀も前のことですから、いまさら新しい言葉なんてあるはずありませんよ。第一、何世紀という言葉の意味ですら今ではたいていの人が知らないのですかねと、いやに世慣れた仕草で肩をすくめた。勿論、俺もそんな言葉の意味など聞いたことがないと答えた。

床はしゃべり易い鏡のようになっている。客たちは鏡にむかって終わりのない説明を繰り返して、鏡を指さし可能性のない解釈を怒鳴りあい、鏡を殴りながら我先におそまつな憶測をわめき散らしていたが、実はそれは話し相手の言葉をただ繰り返していたにすぎなかったのだ。ざわめきは、ありえないほど高く作られた天井に気だるげに反響し、ありふれた言葉と使い古された言い回しがなれ合って共鳴していたが、同じ言葉が繰り返される毎に言葉はいくつもの意味を意味するようになり、次第次第にその曖昧さを増すにつれて、妙なことにホール全体がほのかな光に輝き揺らめき始めた。

話せる時間が賑やかになると、国語委員会も現われた。ホールの中央に突如出現した六人のきらめく国語学者は、その場所で国語学の講義をはじめた。最初はおなじみの「音韻論」で、六人は声を合わせ胸をそらせて六つの母音の完璧な発音の規範を示してみせる。二十八番目から始まって三十二番目までの子音について最新の斬新な理論が紹介されると、講義は「文法理論の基礎知識」に変わった。今日は「形容動詞は何色が似合うか」というテーマで、「無着色相対論」と「被修飾語における赤色変移」理論が徹底的に批判され「形容動詞の極彩色許容理論」として統一されることが示唆された。さらに「形而超学的文章構造に関する覚え書き」として、最後の国語学者が基調公演を行なった。お客は誰もが熱心に講義ノートを取り、初歩的な質問もためらいなく尋ねたから、国語学者たちは極めて満足したように唇を何度も舐め、揃って爪先でくるくると回転してみせた。

それから国語委員会は、客たちのそばにたたずんで話に耳を傾けていたが、やがてその文

字は違う言い回しが不適切だ文法にかなっていないそういう用例はこれまで皆無だと、あたり中のおしゃべりに批評を加え始める。

『いわば言葉というものは、我々国語委員会によって創造され、洗練され、完成されていくのであり、お前たちのように粗雑で無学で自覚のない者たちとは縁のない存在なのである。にもかかわらず、お前たちは恥知らずにも言葉を使い、言葉を汚し続けておる。そのような事をいったい誰が許したというのか。たまさか百歩譲って言葉の使用を許可したとしても、お前たちは最新の文法を記憶し細心の注意を払い間違いのないことを確認しながら言葉を使わなくてはならない義務があり責任があるのだ。そして、我々国語委員会は、そのためにここに派遣され、調査し、指導しておるのである』国語学者達は母音の生まれ変わりなのだと、その頃には誰もが気付いていた。

やがて、言葉の時間も終りに近づくと、国語学者たちの気配が希薄になり、文法に配慮する者の数がへっていく。気付かないうちにテーブルの上から国語辞典が姿を消し始め、誰もが筆記用具など初めからなかったかのような表情に変わっていく。床の鏡はくすんでなにも映しださなくなり、声をあげて話すことが何かいけないことのように思えはじめる。帰り支度の客たちは首をうなだれて出口への列に並ぶが、出口のライトに照らされた店の名前は、左右が反対なのか上下が逆さまになっているのか、それとも語順が逆転しているのか、到底読むことなどできなかった。店の外では格助詞がアスファルトのくぼみを指でなぞりながら、帰る客たちに気付かないふりをしている。そして、店を出ればそこでは、言葉のことなど誰も思い出しはしない。